

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	皆川 知洋
論文担当者	主 査 篠原 尚
	副 査 廣瀬 宗孝
	副 査 藤盛 好啓
学位論文名	Functional Outcomes and Quality of Life in Elderly Patients
	after Restorative Proctocolectomy for Ulcerative Colitis
	(潰瘍性大腸炎に対し、肛門温存大腸切除を受けた後の高齢者の
	排便機能の結果と生活の質の検討)
論文審査の結果の要旨	
潰瘍性大腸炎(UC)に対する標準術式として大腸全摘、回腸囊肛門吻合術(IPAA)が行われるようになってから約40年が経過した。最近では高齢患者も増加し、肛門括約筋の機能の低下も懸念されるが、排便機能と生活の質(QOL)に関しての報告はほとんどない。本研究は同手術を受けた高齢患者の排便機能とQOLをアンケートにより評価した臨床研究である。対象は1987年6月から2015年3月までの間に本学でUCに対してIPAAを受けた65歳以上の患者224名、回答率は60.7%であった。排便機能に関しては独自で作成した質問票(一日の便回数、日中と夜間の便漏れはあるか、またそれらは以前と比較して増悪しているか、便とガスの区別ができるか、パッドを使用しているか、トイレまで便を我慢できるか、止痢薬を使用しているか)を用いた。QOLに関しては2010年に橋本らによって報告された質問票, modified FIQL(mFIQL)を用いた。mFIQLは14個の質問に対する回答を1-4のカテゴリーに分けて点数化したもので、50点以上がQOLの著しい低下と判断される。65歳から69歳までを高齢者群(n=70)、70歳以上を超高齢者群(n=66)と定義した。手術時年齢は超高齢者群が高齢者群よりも有意に高く、観察期間も有意に長かった(p<0.01)。一日の便回数の中央値は両群とも8回で有意差はなく、日中の便の漏れ(53 vs. 56%, p=0.73)と夜間の便の漏れ(65.7 vs. 53%, p=0.16)にも有意差は認められなかった。また、mFIQL scoreについても有意差を認めず、(27 vs. 31点, p=0.25)、いずれの群でも50点未満でありQOLは保たれていた。今回の検討から、IPAA術後長期経過した高齢患者の排便機能は比較的保たれていることが伺い知れた。本研究から得られた結果は、UC症例の豊富な手術実績を有する本学ならではの貴重なものであり、学位論文に十分値するものと評価した。	